



抒情
詩歌

ANINA02

JOJŌSHĪKA

produced by JO-JAY

じょ じょう しい か
抒情詩歌

1. もく じ 目次 mokuji
2. いぶし ぎん 燻銀 ibushigin
3. ざく ろ 柘榴 zakuro
4. ひじり 聖 hijiri
5. ま てん ろう 摩天牢 matenrō
6. ひと ふで 一筆 hitofude
7. せい や し 静夜思 seiyashi
8. いく せい そう 幾星霜 ikuseisō
9. うき くさ 浮草 ukikusa
10. し しょう せつ 私小説 shisōsetsu
11. かい そう ろく 回想録 kaisōroku
12. こう き 後記 kōki

いぶし ぎん
燻銀 ibushigin

シアンしか色が残ってない窓のポスター
なぜ誰もが剥がさず色褪せた
時と共に失われた住処
いつ犯した罪か

どんだけ裏切られても
大切なもの盗まれても
この自負だけは価値に繋がる
学びがあれば明日は軽々と
飛び越えてみせる誰かに仕込まれた
柵と罠に封じ込められた
光り方を忘れた蠟燭は
芯の見つけ方をダウンロードした
誇りがあれば揺らぎなく映る炎
百八掛ける百八の煩悩
指針があれば迷わずにどの
道でも一から実現可能
右脳の断面図のような瑪瑙
松果体の反応、寝ててもメモ
意識は眠れず一晩思案
明け方そっと取りに行く

こん畜生、この野郎
人様をよ、舐めてるんだろ
幅を効かせるのも良い加減にしろ
風を吹かせるのも大概にしろ
そら法螺を吹くのも目に余るし
大風呂敷広げれば鼻につくし
どっからその傲慢が湧き出て来るのか
こっちの方が知りたいくらいな摩訶不思議
人の振り見て我が身は不死身
狭間で揺れる自信と羞恥心
乗り越え自力本願で無事に
舞台に立つ渋さはいぶし銀
成金は歩に劣る集客
詰んでも指し続ける終局
惨めさと憎しみが混じって
墮ちるとこまで墮ちて染みる

ざくろ 柘榴 zakuro

僕の心の中は熟れた柘榴
割って見たら凄い数の
色取り取り想いの種
弾けんばかりの引き金
僕の心の中は熟れた柘榴
覗いて見て掛けた額の
浮世絵の蜥蜴と髑髏
洒落た街、黄昏巻く蜷局

半地下、窓に結露
たまには、起きがけに朝風呂
午後に行きつけの喫茶で屯
行き来するミクロとマクロ
歩く時、気をつける顎の角度
因果応報を受ける覚悟
常に気張ってるからか
楽しみたい時あれど
あれよと言う間のあの世
荒野の夜閉ざされた陸路
冷えた砂漠を頻く頻くと
都会のビル風が路地を吹き抜け
壊れた心臓の穴を笛にする
震える簧、聞こえて来る音は
群れと逸れた蝙蝠の叫び
興枯の宴を耐え忍び
丘の彼方ほんのりと狐火

君の黒子と、涙袋
森の梟、ほうそうだ作ろう
型に嵌まらない歪な積み木
何百もの顔、通り過ぎる踏切
何なんだこの胸の空洞は
何処かと繋がってるのかもね
重い動画、記憶媒体が
メモリいっぱい上書き失敗
無駄なプライドをゼロ消去
せざるを得ない切羽詰まった状況
溢れそうなコップの淵
とっくの昔に一人ぼっち
だって分かってる
でも未だに夢見心地
漠然と黙々と壁打ち
起きる直前にした会話の文字起こし
束の間の異世界の幻

ひじり
聖 hijiri

この魂は昭和の上澄みを飲んで育った
底に沈んだヘドロが酸味があった
あるいは埃被った漫画と小説を
書いた偉人の息吹ではあ茫然と
空白と行間の汲み取り作業
手の平で器用に回す金の画鋏
いつしか黒光る円盤の溝を
覗き込む、針落とし深める思想
迎えた二十代、三十、四十と
路を辿ってる、勤しむ一層
世間との乖離、進んで行く体感
痺れる聴覚、溺れる快感
実験が確信に変異する瞬間
思考回路が生成される階段
ピカッと閃きリセット転換
久々に電源入れる鍵盤

テクニクス二台こそ聖なる祭壇
プラチナよりもハードなチタン
インタビューは鏡の筆者との対談
反転工学不能、知的財産

この鉛は静かに、重しの役を務めて
船の長は梶取り、碇沈めて
穏やかな海面は嵐の直前
目を細め眺める水平線
波乗り達の中に静かに伝染
口ずさむ、あの調べは琴線に
触れる度に旅の終わりの気配
切なさはきっと記録出来ない
この洋上に国境は見当たらず
人種と性、年齢の差別もなく
刃をお互いに切磋琢磨
するその情熱は赤いマグマ
先人のバトンは死ぬまで続く
と信じて帆を張り走る海原
汗拭いながら振り返る波間
嗚呼、跡形もなく消えた泡沫

ベスタクス二台こそ聖なる祭壇
プラチナよりもハードなチタン
インタビューは鏡の筆者との対談
反転工学不能、知的財産

摩天牢 ま てん ろう matenrō

ブラウン管越しに見た摩天楼
ブレイキン震源地のニューヨーク
グラフィティに釘つけ、年は14
毎日欠かさずチェックが重要
中古のマーケットで機材発見
ケースを開いて回路をハッキング
1、2、1、2って本当は one two
通なら分かる、癖になる収集
レコードをかき集めてサンプリング
タンテに二枚乗せてジャグリング
ブレイクネタ当てて一人ニンマリ
真似なんてしない、避けるマンネリ
ラボに立て籠もり己を人質
ゾーンに入ったらいつも夜通し
オートフォーカス極めて手ブレ防止
終わった日には壊す鉄格子

ミキサーのおかげ出来たヒップホップ
天才達の発・発想の文化
原体験こそがストリート文学
骨の髄に届く boom bap

気モチベーション上げてこうぜ
生きた証を残す後世まで
右も左も言論統制
思想も武器だぜ、筋を通せ
佐々木朗希のストレート
正岡子規直々伝授ののけぞるスピン率
鼎鳴る火の玉、流線型
1/ シグマの抵抗ステンレス
ベースラインだけでも低音の火傷
割れた中域と高音だけど
ドープなブツほど瞬時にばら撒く
クロスオーバーなんて超ワック
ところでこの曲の題の由来は
スカイスクレーパーまたは漢文の
天を摩すると牢屋の造語さ
つまりスタジオは雲の上の独房か

ひと ふで
一筆 hitofude

一筆描き先立つもの
掛け替えのないこの上ないハイ
降りてくる何か、湧いてくるアイデアは
どこに向かうのか
今日は誰とバッタリ合うのか
神のみぞ知る由も筋書きは
いつも高次元で鳴ってる
ガラスのぶつかる音
言葉で表すのも難しいから
ただただ神々しい
淹れたコーヒーすすり次なる目的地に
頭がワープ、体がなあ後付いてく
まだまだローテクでもアナログ大好き
愛すべき街並み、どれも己己己
所詮、社会は依怙最良
口ずさむ歌、意気込み
家で没頭ってそれ引き籠もり
言われてもねと
絞ったレモネードみたいに
新鮮なデモテープ
DJに送って早速メドレー
ルーティンが出来て
今からイメトレ行って来るぜ
居直るあれこれ

秋口に咲いた鬼灯
枯れて残った葉脈が美しい
普通の奇跡溢れる毎日
なぜ忘れちまうんだろう
大切にしまってた先の
刹那に生きるつもり
いつの間にか忙しさを
なおざりに、だってさ
季節が来ては去り
お座なりにした仕事
忽せにするのは許せなくて
口車の便乗でなくて
燃料は焚き火の薪と一緒に
エネルギーの無駄だけは避けるっしょ
つまり悟りの境地
歳を重ね、悠悠自適
敵を作らないから無敵
下手にベタ褒めされたって萎えるし
罵られてもガン無視
まるで結界を張る神主
携帯にかけた門
夕暮れに和む暮らし恋しく
情景映える曲、即クラシック

静夜思 seiyashi

静止画のような部屋
裸電球の太陽が照らす
机の上には空のグラスに
散らかった消しゴムのカス
柔らかい影が斜めに入った
壁紙の模様に見失って
我に返れば近所が寝静まった時分に
向き合う心の変化の微分
ようやく自我に耳を傾ける
月並みな表現を照らしては
翻訳蒹葭並に本音の砂払い
平凡な綺麗事じゃつまらない
何か黒いものを捻り出したい
中に溜まってる反吐を晒したい
そんな野望に満ちた午前様
まだ描きたい線は点のまま

静かな夜の思い
静かな夜の思い

ふと目が覚めたら
音漏れしながらうたた寝
疲れてたことより寝てた箇所がなぜか
嘘みたいのスッキリと進む事がある
これだから宿命のイズムを
感じる自分がある
与えられた才能を開花するためには
雑音をシャットアウト
第三のレンズがアルゴリズムに
囚われないようにともかく
情け報われぬ量子力学
匠とは続けて極めたる人
僅かな遊びでも噛み締める人
ネットも無い頃、ゴールは自由だった
窮屈な今の何たるか
革命はコンマ1秒前
暁はすぐその角まで

いく せい そう
幾星霜 ikuseisō

一年、百年、幾星霜
寿限無、夢幻の月玲瓏
九十九、いつまでも幾星霜
寿限無、夢幻の、、、

四苦八苦、してる間に秒針がチクタク
寝る間を惜しんで情報をディグダグ
怠惰と対峙、画面と睨めっこ
流れてくるデジタル比べっこ
スマホの反対トーマス
ヒト亜族の賞味期限オーラス
胎児だった頃はみんな胚細胞
009 ばりに近未来のサイボーグ
寿命を全うするまで真っ向う
から来る鯨に飲まれて発酵
深層海流で神秘の生命体と
戯れる天然の蚕
そこで体感した未曾有の世界
紛らしの芝居はもうやるせない
陸に戻って頭の箝げ替え
潮干狩りに別れを告げたい

四六時中、程良い嗜みほろ酔い
天使の分け前、五次元の物恋
空を見上げたらちっぽけな存在
薇みたいにくるぐる
天体観測、胞子の放出
進化の心拍、動悸がドクドク
何万光年の先から届く光
遮られても凜ときらり
森羅万象、誰も然り
一人とて変わらず純の生成り
生を授かり、姓を預かり
精を尽くし、誠を慈しみ
陰陽の掟と事の決まり
音語呂合わせて韻を蹴鞠
異国仕込みの粋な訛り
詩人ならでは零字余り

浮草 ukikusa

ほんのちょっかいのつもりが、とんだお節介
ふとした仕草、見せた恥じらいに
ついぐらついた、まるで乳歯
その痕は刻まれる永久に

就寝前、天井眺めればちらつく顔
如何せん気が散ってイラつく竿を
戸板に突っ掛けた訳は
建てつけが半端、出入りする隙間風
何故命を運任せ、手透きこそものの上手なれ
慣れよ習うより取る逆手
脇役が主役に成り上がるやがて
切っ掛けは浜まで出た昼下がり
流れ着いた虚船の噂を小耳に挟み
俄かに出来た野次馬の人だかりからは
ちょっと離れた入江に迂回
付いてきたのは野良猫くらい
すると左手からはぐれ雲のような
ぬらぬら光る樽がゆらゆら
果たして藻なのか海月なのか
その中から朧げな人影
なんと現れた絶世の美女
瞼の裏、焼きついた面影

頬をつねっても正気、計っても定規
逆立ちしても逸する常軌
匿ってみても世間は攘夷
つまりこの女を守るのは今日日
何時何時見つかるか分からない
これも運命の悪戯、擲揄い
ならばどんな助けも厭わない
髪の毛が絹より柔らかい

何しろ名を聞いても答えず
そもそも言葉さえ通じず
数日過ぎた頃、急に語り出した
その声は直に頭に響いた
「私を守ってくれてありがとう
この土地に来てからと言うもの
作法ひとつ分からず居たけれど
そなたのおかげで助かったわ
ただ私達の時も川、宵に焦がれても弾ける泡
私にとっては贅の沢、この暮らしとて首に縄」

それから一月だか一年だったかも
覚えていないある小雨の日
貴女はすくっと立ち上がり
勝手口から出て行ったきり
音沙汰無くまた落ち葉が散った
雪が積もっては溶けて澄み切った
春には誰も信じてはくれまい
だが頸には跡の紅
嫋やかに触れ合い確かめ合い
居たたまれなくなったら躊躇い
もしかしたら、傷の舐め合い
毛並みを繕うじゃれ合い

要はただ単に誰かに愛されたい
衣を裸になって撫でられたい
大人になったらダダこねられない
ダメと言われてもその分やりたい
子供の頃、飢えてたもの食べたい
体の中にたらふくしまいたい
満たされても虚しくなる大体
浮草の人生は儚い

し しょう せつ
私小説 shisōsetsu

私小説みたく目眩く頁
語り部の視線、紡ぐメッセージ
歩道橋を駆けて滑り込む地下鉄
車両の中で放つ気化熱
ビート聞いて微かに頷き沈黙
目線伏せてはぐらかす注目
活字で溢れ返る吊り広告
生活を考えて夢遠のく
恋は盲目、ならば愛は強欲
ドブに捨てた道徳
メディアは善の冒涇、狼と羊を放牧
助けは来ないって覚えとく
悲観してる訳じゃなく
現実には巨大な歯車どこにハマるのか
決めるのは自分ってこと
誰のせいにも出来ないし
見せ方次第と見え方次第
絡まった利害
一世一代、打って出る芝居
忍耐強さだけ人一倍
試す輩はとんだお角違い

何小節書いても書き足らん
何小節歌っても飽き足らん
何小節書いても書き足らん
私小説に耽けて然もあらん

引き出しがあり過ぎてネタを何処に割り振り
するかで迷ってるような時期もあったのに
引っ張り出そうとしたら
つかえた拳句中でカビが生えてた
なんて湿地帯も珍しくない
つまり捨てる筈がうっちゃり
いくら溜める癖があっても、物も案も断捨離
境界線にあるか否かお蔵入り
良い加減にやめようか先送りするのは
だから取捨選択、懐かしいだけの価値か
それか何か開け難いフォルダが
実は思い出がどっかで負担になってたり
前に進んだ方がきっと丁度良かったり
寝かした分だけ熟成してるか
急かしたところで覚醒できるか
×切までに吉か凶と出るか
古き良きセル画、仕事モード手塚

かい そろく
回想録 kaisōroku

女神に見初められたトラック
ループとドラムの息が合ったら
相乗効果以上のドーパミン
溢れて洪水もうノータリン
日頃は目眩がするやり繰り
形振り構わずに稼いだ分だけ擦り
テンションを高く保つのは無理
セッションを開くのも久しぶり
プロツール上でテンポ設定したら
繰り返し再生
ネタはワンループで何杯でも行ける
何十回でもリピートしてる
イコライジングは大事
キックのボトム、スネアのリバーブ
ハイハットをちょい上げて
ずるいくらいにコンプで仕上げる
お気に入りのヘッドフォンを装着
両耳から届く至福の時間
どの些細な音も逃さないし
目を閉じてサンプルに浸る
スタジオに流れてた空気が聞こえる
エンジニアの横顔が浮かぶ
何よりミュージシャン達のソウルを
感じる事が出来るこの道具

このグルーヴで揉め
頭から肩まで上下に斜め
背中伝いに月偏に要
ハートはソフト、ビートは硬め
音楽はまるで手料理
素材を吟味、台所の主
ふと気付けば遡ってる
坂の上のノスタルジック

音楽はまるで手料理
素材を吟味、台所の主
ふと気付けば遡ってる
坂の上のノスタルジック
晩ご飯は魔法使いの母ちゃん
冷蔵庫の残り物で炒飯
宇宙一の食卓に感謝
幸せ噛み締めて送るアンサー
音楽に合わせ手拍子
たまには馴染みない港も歩き
ふと気付けば遡ってる
坂の上のノスタルジック

クレジット credits

抒情詩歌 JOJŌSHĪKA

produced by JO-JAY

written by Shing02

1. 目次 mokuji

narration by Motofumi “POGGY” Kogi

2. 燻銀 ibushigin

drum breaks by A.J. Hall

chorus overdub by COOKI3

3. 柘榴 zakuro

chorus overdub by Mouthpeace

sample tone by Reatmo

4. 聖 hijiri

chorus overdub by HUNGER

5. 摩天牢 matenrō

chorus overdub by Daichi Yamamoto

6. 一筆 hitofude

norito sample by CCD (AUDIO JAPONICA)

7. 静夜思 seiyashi

chorus overdub by Hisomi-TNP

8. 幾星霜 ikuseisō

chorus overdub by MEISO

9. 浮草 ukikusa

drum breaks by A.J. Hall

chorus overdub by Candle

female overdub by kb

cat purr by Taku Obata

10. 私小説 shisōsetsu

chorus overdub by Hisomi-TNP

beatbox by Reatmo

11. 回想録 kaisōroku

drum breaks by A.J. Hall

chorus overdub by Daichi Yamamoto

additional chorus by Hiro Watanabe

12. 後記 kōki

narration by Motofumi “POGGY” Kogi

all scratches by Dai-Nasty

vocal samples by Yo Aoi

recorded and mixed at Annen Annex, Honolulu

mastered by Ryota Hayashida (Iroha Studio)

cover art “Arrangement 10” by KENTA SENEKT

title lettering by Shiro Ishihara (SNEA)

booklet design by Yoshitaka9